杉間伐材で型枠用合板

新丹生谷製材と県が製品化

軽く作業効率良い

コンクリ工事に利用

那賀郡丹生谷地域の製材業者五社でつくる新丹生谷製材協同組合（鷲敷町）と徳島県が、杉の間伐材を使ったコンクリート型枠用合板を製品化した。型枠用合板のほとんどを占める外国産材と比べ、軽く作業しやすいのが特徴。公共工事での間伐材の利用促進を狙ったもので、県は本年度から県が行う森林土木工事で使用している。

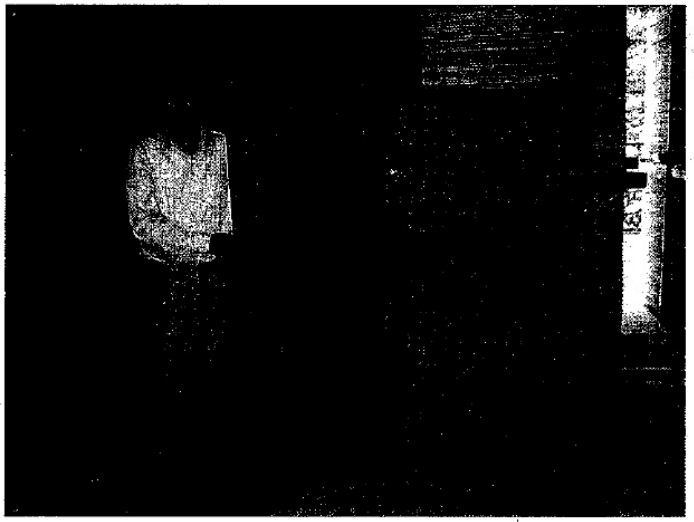
合板は、長さ二㍍の丸太を厚さ二㌢にかつらむきにし、乾燥させ、六枚を張り合わせた。コンクリートと接する面は、型枠がはがれやすく、きれいな仕上がりとなるようウレタン樹脂を塗装。また木口にも防水剤を塗布して変形を防ぎ、耐久性を向上させた。

丹生谷地域は県内有数の林業地帯。直径二十㌢ほどの杉の多くが間伐時期を迎えているが、切り出しても木材としての需要が少ないのがネックとなっている。新丹生谷製材が同型枠用合板への製品化を発案し、県阿南農林事務所、県森林林業研究所と共同で試作や性能評価を進めてきた。

県によると、製品の強度は、杉間伐材ではヤング係数（曲げにくさの指標）が55と外材の75に劣っている。半面、曲線部の施工には有利で、重量も外材製品の四分の三ほど。市場価値の低い曲がり材や黒芯（しん）材も利用できる。ただ、製造コストは外材製品より四ー五割ほど高くなるという。

県は本年度、阿南農林事務所管内の治山、林道工事で同合板を原則採用しており、年間約七千平方㍍を使う予定。県林業振興課は「試算では型枠合板を千平方㍍使うと約一・五㌶の森林整備につながり、伐採や木材加工などの経済波及効果も生まれる」と強調する。製品の施工マニュアルも作成し、県内全域に広げていきたい考えだ。

新丹生谷製材の高木健男理事長は「間伐材を地産地消で有効活用できないか、というのが製品化の発想。建築資材としての応用も研究していきたい」と話している。



新丹生谷製材協同組合と県が共同開発した杉の間伐材を使ったコンクリート型枠用合板＝鷲敷町内の同組合

徳島新聞
発行所 徳島市中
5番地2
徳島新
電話(088)65
郵便振替口座01
©徳島新聞社

ニュースは
事件、事
題、写真
連絡は下
鳴門支局 088-68
松茂支局 088-69
板野支局 088-67
小松島支局 08853-
阿南支局 0884-2
石井支局 088-67
鴨島支局 0883-2
市場支局 0883-3
脇町支局 0883-5
池田支局 0883-7
鷲敷支局 0884-6
日和佐支局 0884-7
牟岐支局 0884-7

徳島新聞社販売部謹製「メモリー徳島」